

M i x i コミュニティ
『創作が好き！』
編集

作品集

「ある日目が覚めると、
そこは——』

3月20日～4月1日限定実施企画
『ある日目が覚めると、そこは……』
参加作品集

前書き

MixiというSNS(ソーシャル・ネットワーク・サービス)には、コミュニティというシステムが存在します。まあいわゆる『グルー・プ活動』なのですが。

私が副管理人を務めるコミュニティ『創作が好き!』は、『創作活動を行なっている人たちがのんびりと楽しめる場を提供する』という管理人のしちみ黒猫氏の提唱により、現在のんびりと運営が進められております。

まあそろは言つても、ただ場所を提供するだけでは味気ないですから。そこで私は、公園で遊びを提案する子供のように、企画を立ち上げてコミュニティ参加者に作品を提供してもらおうと考えました。

今回取りまとめた作品集『あるひ日が覚めると、そこは……』もまた、企画として提案されたものの一つとなります。

※この欄には注釈、および編者による著者紹介が入ります。

提案した際の条件は、たった一つ。

冒頭に必ず、

『ある日目が覚めると、そこは』

という文章を入れて頂くだけ。

それ以外は文章の長さも、ジャンルも問いませんでした。

眠りから覚めた時に見る景色と、

そこから展開される予想を超えた展開を、

ぜひご堪能くださいませ。

Mixiコミュニティ『創作が好き!』副管理人
および当イベント企画立案者

橋崎 六呂(かーる)

『チラシ』(MIDOJI 著)

著者紹介
MIDOJI

ある日目が覚めると、そこはいつもの僕の部屋。の、中に知らない人間が十人。いや、十五人？

「三十人です」

寝ぼけ眼の前に、眼鏡の青年の顔がどんと現れ覗き込む。うわ、殺される。助けて。死ぬ前に、沖縄行きたかった。

「見て下さい。この行列を」

彼の後ろの人間たちの、もつと後ろにも大勢いて、それは僕のアパートの玄関の外まで溢れている。

一体、何が起こうたのだ。

3月30日生まれの『文学派ロック少女』。精力的に創作活動を続けてます。その作品はテンポを殺すこと無く、しかし文章によどみのない、まさしく独特の『文学』。

好きな作家は太宰治、好きな言葉は『無心』。好きな漫画はクレムリン。

状況を把握できぬ僕に、青年が一枚の紙を差し出した。
それをみて、はつとした。

そうか、昨日……

昨日、僕は古本屋に行つた。

気合いを入れて15時間睡眠し、近所のお地蔵に片つ端からブルースのCDをお供えし、袈裟を着て、バイクに乗つている僧侶にひとしきり憧れたあと、いつもの古本屋に行つた。

そこで、ふと、ある宗教の本が目に入つたのだ。
開いてみると、そこに書かれた言葉に衝撃を受けた。

“偶像に頼るな”

これだ！と思つた。電流が走つた。

すぐに本を購入し、大事に抱きかかえて帰宅した。

家にあるチラシを片つ端から寄せ集め、裏返し、
マジックの大きいほうのペンで、

“偶像に頼るな”と何枚も何枚も書いた。

僕はこれを配ることにした。

皆が寝静まる深夜まで待つて自転車で外に繰り出し、
あらゆる場所にばらまいた。

興奮して意味不明な言葉を叫びながら家へ戻り、疲れ果て寝た。

僕は昨夜とんでもないことをした。

皆、怒つてこの場に集まっているのだ。

それを撒いたのが僕だと皆知っているようだ。

警察に通報されるだろうか。

こわくて布団をかぶった。

かぶつたところで、どうにもならないが、かぶつた。

青年の声がする。

「この言葉の真実をお聞かせ願いたい」

何だ？ 真実？

ふとんから顔を出すと、皆、しんと静まり返つて、こちらを真剣に見ている。

「『偶像に頼るな』。この言葉の真実をお聞かせ願いたい」「どうやら、僕の答えを待つている。

皆の目は、心なしか、輝いている。

と、

「お願いします！」「どうかお言葉を！」

うわざり高揚した声があちこちで湧く。

期待する者達の声で、僕の部屋は大合唱になつた。

教祖。という言葉が頭に浮かぶ。

どうやら、僕は、知らぬ間に教祖になつていてる。

どうか。僕はあつという間に三十人を引き連れる指導者の地位を得たのだ。

僕を求める者達を眺めて、おもわず左の口角があがる。

いやしかし、待て。

僕は首を振る。

駄目だ。

僕は『偶像に頼るな』という言葉が、格好よくて
気に入つただけで、意味はまったくわからない。

本を最初から読もうと思ったが、難解で、
2行目で読むのを断念することに成功した。

言葉の意味も何も知らないのだ。

だが、ここで答えられないと、僕は目の前の大勢から
失望されてしまうだろう。

そうなれば、僕のスキー用エアだけ。ピンク色のやつにすり替えられたり、「お風呂湧いたけど……きみは最後に入つてくれない?」などと言わ
れる人生になるだろう。

謝るのだ。

すいません、と正直に告げるのだ。

僕はからからに乾いた口をゆっくり開ける。
皆が注目する。

「す…」

「す？」「皆が復唱する。

「…す、

「すい？」

「…水曜日…」

負けた。皆の威圧に、負けた。僕は怖気づき、変なことを口にした。

「水曜日の、何ですか！」

青年は、はやる心を抑えきれず、半分怒鳴つてしまつていてる。
ええい。こうなれば、もう、出てくる言葉に身を任せよう。
僕は教祖である。

だから、許してほしい。

「『偶像に頼るな』とは、水曜日の……」

ごくり。

「水曜日の、屈伸運動と赤い色鉛筆である」

やはり、殺してください。

しいん……としたままの部屋。

だが堰を切ったように、一斉に、群衆から感嘆の声があがつた。

雄叫びをあげる者もいれば、涙を流す者もいる。

万歳三唱が、わんわんと部屋の壁に響く。

青年は目を見開き、あらぬ方向を見つめながら

「我々は新たな光を得た…得た…」と、ぶつぶつ独り言をいい、

身体を震わせながら帰つていった。

他の者もそれに続していく。

そして僕一人、がらんとなる部屋。

僕は、"水曜日の屈伸運動と赤い色鉛筆"について、考えねばならなく
なった。

(ア)

無題(文流 著)

ある日目が覚めると、そこは水中だつた。

不思議と苦しくなく、息も普通にできる。陸上かとも思つたけど見上げた景色は水中からのものだし泳げる。

上からの光で水面はきらきらと輝いていて、思わず手を伸ばした。

届かない。

……何に?

わからぬ。

……上から?

上つてどうち? 私は上を向いてるの? 本当は――

著者紹介
文流

幻想と現実の境界
線を行く短編を
得意とする作家さ
んです。

当コミュニティ上で
も幻想的な作品を
投稿されています。

好きな作家は
桜庭一樹。
好きなゲームは
RPG。

痛みがはしうた。

どこがかはわからない。特定できない。

でも痛い。痛くて痛くて、私は、わたし、は、――

焼かれるような痛み。

眩しい。痛い。苦しい。

息が喉を震わせて音になつて、

悟つた。

(ア) 私は今生まれたんだ、と。



【カオス短編小説】ある日目が覚めると(たかーき 著)

著者紹介
たかーき

6月4日生まれ。

エログロ・ナンセンス
や不条理な物語を
紡いだり紹介した
りするのが好きで、
旅行好きなp.o.i

パフォーマー。

好きな作家は丸尾
末広。夢野久作、
阿部公房、ぴろ。ぴ
とさん、ウメズカ
ズオ、ねこぢる等。

ある日目が覚めると、私は拘束されていた。

鉄の台の上に乗せられ、両手・両足を金具で固定され、大の字に寝かされている。

とはいっても、こんなのは大した事ではない。

私はそんな身動き一つ取れない状態の中、「どうせ夢だろう」と思った。
どうせここで殺されるという展開になり、うなされて目が覚める。パ
ターンだろう。

天井の鉄格子を仰ぎながら、仄暗い部屋の中で私はそう思った。

しかし、突然左足に強烈な鈍痛が響き、私は「痛い！」と大声を上げ
た。

今の痛みは明らかに夢の中のそれではない！
本当に何かに叩かれたのである。

私は、自分の左足のほうに目を動かした。

目線の先にいたのは、神だつた。

私に命を与えてくださつた、あの神だつた。神は、真っ白な全身タイツを着けていた。そして、おでこに「神」という字を書いていた。

「あなたは！」

と、私は驚きの声を上げる。

「試験管よ。」

神は、私の名を呼んだ。試験管。

「お前の、ニシゲンとしての生命活動は、以上で終了だ。

それは、突如として終わりをもたらされるものであるが、誰しも終わりを迎えるときには、

靈的な運命感覚によつてその事を察知するだろう。

しかしそれを、試験管、お前が感じなかつたのは單に、

私が今日、いきなりお前を終わらせることに決めたからだよ。」

「待ってください！！私が何をしたというのですか？私が、かの規定にそむくような真似をしたのですか！？」

「ああ、した。いや、というより、規定には何一つ沿つていなかつた。まず第一に、お前が小学校に通つていた年齢のときに、お前は将来の夢に、『漫画家になりたい』と書いた。

それがまず第一の原因だ。」

「何を言うのです！？そう書いたことの何が悪かつたのですか？」

その夢が実現されなかつたことですか？

せつかく一度きりの生を与えられながら、夢を実現しようとしたなかつたことで、私が罰を受けるという……」

そう言いかけて、私は頬をバシン！と叩かれた。

「痛う！」

「愚かな。そういう問題ではない。お前はそう書くことによって、定められた運命のうちの一つ消化し、また、次の運命を作ろうとしてしまつたのだ。」

「……なつ、何ですか？言われている意味が理解できません。運命を消化？それは一体…」

「黙れ。まあついでに他の原因も教えておいてやろう。お前には癖があった。毎日一人で部屋にこもると、そこで自分の実の弟への悪口を言つていたな。」

「それは……。しかし、私はそのことについては反省しています。私は……」

そう言いかけて、私は右足にまだ非常に強烈な痛みを感じた。

「いつ…！い、い、痛い！痛い！」

「低俗な試験管よ。教えておいてやろう。お前が悪口を言うのは自分の弟だけではなく、全世界の、全人類に対してでなければならなかつた。」

「な、何を仰っているのですか？」

私はその言葉の意味を繋ごうとした。

「も、もしやあなた様が仰るのはこういうことですか？弟に、つまり自分の身近なものに、負の感情を押し付けて満足していることが良くなかったと。だから、世界に対してその感情を向けて、えつと、その、なんか、というか、社会に向けて昇華するというか、その……」

と、私が喋りかけていると、今度は私の全身を、強烈な電流が流れた。「があ、あああ！……！」

その電流は10秒ほど流れ、私は全身がピク。ピクと痙攣し、辛うじて呼吸をするのがやつとだつた。

「試験管よ。お前の理解はその程度であり、お前の存在もその程度であり、お前の運命として定められている絶対量もその程度なのだ。凡庸な。そんな通り一遍等の話をしているのではない。最後に一つ教えてやる。お前は昨日、家を出るとき、左手で鍵をかけたが、右手でかけていれば、こういう事にはならなかつた。」

「何を仰つているのか全然分からぬ！……どういうことですか！」

そのとき、私の頭上で、「キュイイイイ」と、ドリルが回つているのが見えた。

ドリルは、私の目玉めがけて降りてきた！

「うわああああ！」

「試験管よ。お前は、先日旅行に中国の北京へ行つた。しかし、香港で無ければならなかつた。お前が勝手に北京へ行つたから、第一次世界大戦は起きた。」

「やめてください！やめてください！！」

「試験管よ。お前が野球部でピッチャーをしていたとき、お前はボールを投げる前に必ず深呼吸をする癖があつた。しかし、その呼吸が少し浅かつたのだ。だからお前の祖母は、交通事故でなくなつたのだ。」

ドリルは、私の目のすぐ近くまで迫つている。

「試験管よ。お前は、猫が車に轢かれそうになつた時、助けたことがあつた。また、道路にあつたねずみの死体を見たとき、それをせせら笑つていた。しかし、お前は猫が轢かれるのを黙つてみていなければならず、ねずみは助けなければならなかつたのだ。ねずみは見たときに既に轢かれていた、などという言い訳は通用しないのだ。お前がそれをしてなかつたせいで、東京ディズニーランドが日本のテーマパーク業界の売り上げのほとんどを占めてしまつたのだ。」

ついに、私の目はドリルによつて削られた。
血がほどばしつた。

「試験管よ。たうた一度だけお前は、自分のやり方が正しいのか、疑つたときがあつたな。

『今日は8チャンネルのバラエティ番組を見ようか、それとも真面目にニュースを見ようか』と。

あの時、お前はニュースを見てしまった。その決断が、良くなかったのだ。

いいか？さつきから意味不明な事をいつていると思うかも知れぬが、實際は簡単なことなのだ。お前が唯一守るべきだつた掟、それを心得ていれば、お前の人生でやるべきであつた行動の全てが決定されるのだ。その掟というのは……」

と、神は説明を始めたが、私は既に死んでしまつたので、その説明が私の耳に入つてくることは無かつた。

(終)

嫌な予感（しちみ黒猫 著）

著者紹介
しちみ黒猫

ある日目が覚めると、そこはかとなくいやーな予感がした。

目覚めが悪いわけではない。むしろ、いつもよりすつきりさわやかに目が覚めたぐらいだ。空気が美味しい、というのが最初の印象だった。冷えた空気は凜として透明度を増しているようでもあり、そんな清らかな源流のような空気を胸に吸い込んだせいで目覚めが良かつたのかと思った。

朝のことなく騒がしい感じもなく、静寂に包まれた幻想世界に目を覚ましたような印象も受ける。窓の外が妙に明るいような気がするのだ。

この感覚は、その正体に、俺はふと思いつた。窓を開けると、思つた通り。夜の間に雪が降つて、外の一面を銀世界に塗り替えていた。雪は音を吸い込み、光を反射する。それで外は静かになり、いつもより明くるくなるのだ。ぱつとみ、一晩の積雪量は50センチぐらいか。やられた。玄関やガレージ前の雪かきもしなければ。除雪も始まるだろう。通勤路の交通も渋滞気味になることが予想される。

6月20日生まれ。
猫とイルカとドライブが大好きなアラフオーレ代。
NiziUの時代からネット上にて小説を公開されている、ネット作家の重鎮。
著作に『シャム猫物語シリーズ』
『猫日銀河シリーズ』
『月と戦車』
『ゆらゆらゆれる』等。
趣味はドライブとカメラ。
隠し芸はピアノと占い。

天気予報を少しでも気にしていれば、朝はもう少し早く起きなければマズかつたのだ。

しかし、いやーな予感の正体は他にも何があるような気がして。どうしても嫌な予感がぬぐえなくて。それで、おそるおそる、時計に目をやつた。

「げ……」

(ア) 目覚まし時計が、寝坊していた。

『一日酔いの朝に』(檜崎 六呂著)

檜崎 六呂

1973年2月

福井県福井市に生まれる。

ハンドルネーム
『かーる』として、

Mixiのコミュニティ
『創作が好き!』

にて副管理人を務める。

消防設備士の仕事の傍ら、高校時代から25歳まで
続けていた執筆活動を再開。

ある日目が覚めると、そこは寝室らしき部屋だった。

私が今まで眠つていたベッドとシンプルな黒いテーブル、こじんまりしたクローゼットがあるくらいのシンプルな部屋。

今まで一度も来たことのない、少なくとも記憶にはない部屋だった。
(え? 何? ビック?)

慌てて起き上ると、こめかみにずきり、と刺すような痛みが走る。
(うわ、一日酔い? なんで?)

私はこめかみを指で揉みながらベッドの縁まで身体をずらし、ベッドに腰かけるように座ると、改めて自分の身体を確認する。

(うて、この。バジヤマ男物じゃない。誰の? ってか私やつちやつたの?)

私は湧き上がる恥ずかしさと情けなさでいっぱいになり、思わず手で顔をおおう。

(やつちやつたんだなあ、また飲み過ぎた。

で、記憶をなくした。

いくら可愛がつていた後輩の送別会だつたからといって、無礼講にも程があるだろう。

(羽山くんに言われたのになあ。気をつけて、つて)

『楽しんでくるのは良いんですけど、ハメはずさないでくださいね。あと、浮気もダメです』

昨日の夕方、ウキウキしていた私に彼が苦笑い混じりに言つていた言葉が脳裏をよぎる。

(ごめん、羽山くん。そんなつもりじゃなかつたんだけど、やつちやつたみたい)

少なくとも、今私のいる部屋は彼の部屋ではない。

ましてや、私の部屋でもない。

ということは、見知らぬ男性の部屋だということになる。

(キツチンがない……ってことは、ある程度大きな部屋よね。そこに居たメンバーはみんな若い独身のコばかりで、そんなに大きな部屋を借りているような感じじゃなかつたし)

私はズキズキと痛む頭を押さえつつ、なんとか昨夜のことと思い出そうとする。

超短編小説を毎日一作品執筆す

る傍ら、中長編作品の執筆も精力的に進めている。

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『サンタクロース☆クライシス』などがある。

プロレスはニー
ハーリー的に大好き。
詰問と無視に弱
い。

(確か7時に始まって、飲み始めたら楽しくなってきて、……だめだ、誰かに携帯で電話をかけた」とくらいしか記憶がない)

「……あ、携帯！」

私が慌てて自分の携帯がないかと部屋を見回すと、先ほどのテーブルの上にハンドバックと共に並べて置かれているのを見つけた。

「あつた、良かつたあ」

私は倒れこむようにテーブルに近づくと、慌てて折りたたまれた携帯を開き、発信履歴を確認した。

「あれ？ 羽山くんだ、最後」

私は画面に表示された21時13分の発信履歴に『羽山 翼』と表示されているのを見つめる。彼の名前がこれほどまでに安心感を与えてくれるとは思っていなかつた。

「そつか、羽山くんに電話してたんだ、私

私はほつと息を吐くと、携帯をたたもう……として、ふと違和感に気づいた。

(あれ？ ジャアア) は? (?)

羽山くんに連絡して迎えに来てもらうたのなら、今いるところは私の部屋か、少なくとも彼の部屋でなきゃいけないはず。

(もしかして私、電話するだけして一人で飲みに行つたとか?)
再び感じた嫌な予感に、私の頭からさあつと血が下がっていくのを感じる。

(ちよ、と、とにかく、羽山くんに電話)

私は慌てて携帯を持ち替え、彼の番号が選択されているのを確認して、
通話ボタンを……。

その時、部屋のドアがノックされたのだ。

「うひやつ」

私は飛び上がりんばかりに身体をびくつかせ、妙な悲鳴を上げた。

どんな男性が顔を出すのか。
知つてゐる人だったら、絶対やだ。
ごめん、羽山くん。

私は恐る恐るドアに目を向け、どうぞ、と声をかける。

私の声が聞こえたのか、ドアがかちやり、と音を立てて少しだけ開き、そこから、50代くらいの女性が顔を出した。

「あら、ずいぶんと元気そうだけど、一日酔い大丈夫？」

女性はそう言ってコロコロと笑うと、すっと部屋の中に入ってくる。愛嬌があるのに隙がないその女性の動きに、私は思わず感嘆の声を上げそうになった。

「あ、はい、ありがとうございます」

私は慌てて正座しお礼の言葉を告げる。

いや、別に正座は必要なかつたのかも知れないけれど。

「あら、良いのよ。あなたのおかげであの一人も和解したみたいだし」「あの……一人？」

私がオウム返しに尋ねると、女性は覚えてないわよねえ、あれだけ酔っ払つたら、と再びコロコロと笑う。

「ほんと、翼があなたを連れてきたのにも驚いたけど、そのあなたがいきなり一人に説教を始めるんだもの」

びっくりしたけど、スッキリしたわ、と笑いながら言う女性を見て、私はようやく昨夜のことと思い出した。

『良いわよねえ、寿退社あ』

送別会の帰り。

タクシーで迎えに来た羽山くんに、酔っ払った私は盛大に絡んでいた。
『結婚よ？ けつこん。血の跡じゃないんだからねえ？』

『はいはい、先輩。あんまりテンション上げてると寝ちゃいますよ』
「コ」コと笑つてはいるが、盛り上がりがつている私に併せるつもりはないらしい。

よし、じゃあ言つてやる。言つてやるんだ今日こそ。

シラフじゃとても言えないもの。

『あーあ、良いなあ、結婚』

私は酔つた勢いに任せ、前を向きながらわざと口を尖らせて言つてみる。

つていうか、むしろこれを言いたいがために電話して迎えに来てもらつたといつても良いくらいだ。

『……結婚、ですか』

羽山くんはしかし、ふう、とため息をつくと、口を尖らせている私の頭をぽん、と軽く叩く。

『僕も先輩となら、つて思うんですけどね』

『……なあにい？ですけどね？』

カチンと来た私が彼を見ると、しかし彼は暗い表情で窓の外を見ている。

『父親と冷戦状態なんです』

彼の話が突然変わった。

いつもなら理路整然としているはずの彼が突然脈絡もなく話を変えることなんて珍しかったので、私はとりあえず話を促す。

『昔から父親は仕事人間で、家のこと一切を母親にさせてたんです。母親だって仕事してたのに、ですよ』

彼の口調にどことなく怒り、というか不満のようなものがこめられている。

普段あまり感情を表に出さない彼がここまで言つといふことは、よっぽど酷かつたのか、お父さん。

『で、まあ、親を見てて、結婚なんて良いもんじゃないのかな、つて』
先輩と、ずっと一緒にいたいとは思ってるんですけどね、と苦笑いする彼
を見て、私の胸の奥でくすぐづつていた何かが一気に迫り上がりってきた。

なんじゃ、そりや。
ふざけんな。

『……羽山くん』

私の声に、彼が何故かびくり、と身体を震わせる。

『はい、何ですか先輩』

『羽山くんの実家、遠いんだっけ？』

『え？ いえ、都内ですけど』

私の突然の問いに、彼は狼狽えながらも答える。

『そう。じゃあ連れてって』

『え？ え、でももう10時』

驚く彼の声を遮るように畳みかける私。

『良いからー！ 連れて行きなさいー！』

ここで仕事口調を使うのは卑怯かもしれない、などとは全く思わなかつた。

『は、はい……運転手さん、すみません……』

彼が了承して運転手さんにルート変更を指示しているうちに、私の意識が薄らいでいった。

正直に言うと、その後のことは断片的にしか思い出せない。

彼の家に着いて、ご両親が玄関に出てきて、彼が私を紹介して。

私が彼のお父さんと彼を客間に連れていき、何かを一生懸命にお説教した、つてくらい。

多分お説教の内容も、覚えてないけど予想はつく。

許せなかつたのだ。

高校時代に両親を無くし、天涯孤独になつた私からすれば、生きている家族がすれ違つてゐることが、許せなかつたのだ。

そう、私は、やらかしてしまったのだ。

結婚したいと思っている彼の「ご両親に、あろうことか酔っ払った状態で怒鳴りこんで、説教までしてしまったわけだ。
穴があつたら入りたい。

むしろ、このまま溶けてしまいたい。

「改めまして。翼の母親をしています、多江と申します」

先ほどの寝室。呆然としている私の前で三つ指をついて頭を下げているのは、先ほどの女性である。小柄で丸顔、目がクリンとしていて笑顔が可愛い女性だ。

「あ、あの、すみません、江城里香と申します。はや……いえ、つ、翼さん、その、その、」

しどろもどろで答える私に、顔を上げた多江さんがにっこりと笑う。
「翼から聞いてますよ。いつも翼がお世話になつてます」

「え、いえ、こちら」そいつもお世話されてる方で

「おまけに、昨夜は翼とうちの旦那の関係まで修復してくれたでしょ。
感謝しても足りないくらいよ」

につりと笑つたまま話し続ける多江さん。

「い、いえ、すみません。なんだかお酒の勢いで余計なことをしてしまつたようで」

私の返答に多江さんがコロコロと笑い、ゆっくりと立ち上がつた。

「とりあえず朝食の用意は出来てますから、一緒にいただきません?」
正直一日酔いのげんなりした胃袋で食欲もほとんどなかつたのだが、
ここで断つたら女がする。

私はしつかりとうなづくと、ゆっくりと立ち上がつた。

(ア)

無題2(文流 著)

ある日日が覚めると、そこは町外れの野原だった。

自分の家のベッドで寝たはずなんだけどなあ。そばにあつた買った覚えのない林檎を齧りながら空を眺める。

どうしてボクはここにいるんだろう。知らないだけで夢遊病なのかな。「そんなわけないでしょ」

いつの間にか隣に立っていた白いワンピースの女の子が呆れたように言った。

「ちゃんと起きて、自分の足で私をここに連れて來たじゃない」

「あー……うん」

そうだったかなあ。

芯だけになつた林檎を捨てようとしたら隣から伸びた手に取り上げられた。

「ちゃんとゴミ箱に捨てないと」

「めんどく

頭を叩かれた。結構痛い。

「なんだよ」

「ゴニはゴニ箱に、よ

「ちえつ」

「ずり落ちたお氣に入りの帽子を被り直す。

「どうでさ」

「うん?」

「キニは、誰?」

女の子はきよとんとして、すぐに微笑んで小さく首を傾げた。

「それは、キニが一番よく知つてると思うんだけど? ねえ、」

ざあ、と風が吹いて女の子の言葉はかき消された。

目を閉じる直前に見えた笑顔が、何かを思い出させた。

「…………あれ?」

また目を開けるとベッドの中だった。
夢、だつたのかな。

ぼんやりした頭のまま時計を見る。

一瞬、時が止まつた。

「うわ、もうこんな時間？！」

慌てて飛び出して洗面所に駆け込む。
顔を洗つて、歯をみがいて、寝癖を直し

——ふと気付いて思わず笑つてしまつた。

(ア) なんだ。あの女の子は、ボク
いや、私だつたんだ。

脳次元の彼方へ（しちみ黒猫 著）

01

ある日目が覚めると、そこは女学生の中だった。

脳内空間の広がりが三次元方向だけではなく、少なくとも五次元の広がりを持つことはすでに知られている。今のところ確認されている範囲では、という話で。論理的には七次元説だと十六次元説だとかもあるのだが、人の手でどうにかなっているのは五次元までということなのだ。

人工的に作られた脳の構造は、どうがんばっても今の技術では四次元ましか再現できていない。有機組織を使った物理脳でも、量子コンピュータのようなもので原理だけで仮想再現した論理脳でも、四次元以上の広がりを持たせることができないのだ。だから、宇宙船の超光速航行用エンジンの心臓部には、生きた人間の脳をそのまま使う。エンジンの中心に人間がおさまっているわけだ。

私は、その宇宙船の航海士だつた。つまり、エンジンの中心におさまつて船を転送する仕事をやつていたのだ。自分の、脳で。ところが私は、コントロールのミスを犯して、船は重大な事故に遭つた。おそらく私の肉体はその事故の瞬間にいるまま、見て感じるものだけがいつの時代だからもわからぬ女学生の脳に投射されているのだろう。時間の流れる感覚さえ、リアルタイムではない。私の脳が蒸発するまでの一瞬が、極端に引き延ばされていいるのだ。

女学生は、そんな私の存在など気づかず、背伸びなどしている。朝は苦手の様子だ。ベッドから下りて、階段をぱたぱたと下りていく。うるさいなあ、お母さん。もう起きたうてば。ごく中流の家庭のようだ。彼女の記憶を、それとなく見回してみる。あれ、なんでだろ。小学校の入学式のことを、急に思い出しちゃつた。やだ、遊園地に行つたこととか、おねしょしたこととか。なんであたし、こんなこと考えてるんだろ。やだ、遅刻しちゃう。どうやら彼女は、洗顔に向かうらしい。自動洗浄といった道具はないのだな、この時代には。

洗面台の鏡に、彼女の姿が映つた。なんと、これは、驚いた。色白の肌、つやのある黒髪。可愛いじゃないか。いかん、一目惚れしてしまつた。

いや、なに。どうしてあたし、自分の顔を見て、赤くなっちゃってるの。やだ、どきどきしてきたあ。

私は間もなく死ぬのだろう。数瞬後か、数十年後か、わからないが。こういう最後なら、悪くないかも。え、なに、あたし死ぬの。うつそー。いや、死ないから、君は。混乱に慣れてきたら、いつか話そう。我々二人の人生は、今朝、始まつたばかりだ。悪くないじゃないか。

はあ？ だから、意味わからないうつて。あたしの中の私。

ある日目が覚めると、そこは冷たい手術台の上だつた。

天井は真っ白な照明。6人の医療スタッフの、大きなマスクに白衣といふそろいのコスチューム姿が、ぐるりと取り囲んでいる。サポートスタッフを含めた、この室内だけで10人以上がたずさわる、大規模なオペになる。

私は次元脳外科医だ。脳の四次元構造や五次元構造が解明されるにつれ、それまで原因不明の難病とされていた疾病や障害の治療法がいくつも発見されてきた。なにしろその原因というのが、たとえば比較的簡単なものでも、前世にあつたとか。遺伝的に発症したとかそういうレベルの話ではなくて、文字通り、生まれ変わる前の誰かが脳に外的障害を負つたのがきっかけで、時間と空間を超えて今の患者に発症していたりしたのだ。

そういうた高次元脳障害の手術は、もちろん脳次元制御技術が必要になる。宇宙船の航海士にも似た高度な専門技術が必要となる。

医学知識が必要なのは当然なのだが、いわゆる脳外科医としての従来の知識はさほど役に立たない。そういうのは、脳に電極やセンサーを次元同調系の機器を接続するスタッフのほうに要求されるのだ。

私は、意識を高次元に飛ばして、患者の脳の過去や未来や、そういう言葉では表現できない方向へざぐりを入れて、障害の原因をつきとめることがある。こうして患者の意識の中で目を覚ましたということは、同調はうまくいっているということだ。でも、何かが違う。これほど鮮明に患者と連携できたのは私の経験でも初めてのことだ。これほどうまくいっているのに、何かひつかかるものがある。

いや。違う。目が覚めたことが、異常なのだ。脳次元手術とはいって頭蓋を外して脳を露出させる手順がともなう。なのに、なぜ目が覚めているんだ。これは、いけない。これは、麻酔が……；麻酔が、切れてる！ 麻酔医のやつ、間違えやがった。だめだ、これ以上同調が進むと……。

うぎゃあああああああ！
いてえええええええ！

ある日目が覚めると、そこは暖かい布団の中だった。

ふわふわやわらかいおふとんの中で、俺は目を覚ました。頭まですっぽり布団の中におさまって、体を丸めているのだ。横になつたまま手足をうーんと伸ばして、背伸びをしてみる。それでも布団の中なのだ。ずいぶんでつかい布団だ。

うつすら目を開けて、あたりを見回そうとして、そして、仰天した。俺の目の前には、半裸の女がいたのだ。同じ布団の中である。それにこの女、やけにでかい。いいにおいは、この女から匂つて来るようだ。

おかあさん。

この脳の持ち主が、女をそう認識していることがわかつた。目を覚ましたといつが、女を見るなり、そう考えたのだ。なるほど、わかつてきたり。次元ドラッグの暴走でどこか別の脳と同調しているのはわかつていたが、どうやら赤ん坊かなにかと混ざつたのだ。こいつは言語で「おかあさん」を認知しているのではなくて、なかば本能的に保護者概念としての母親を意識したのだ。

おかあさん、とうう印象がどかばやつとしているのも、そのせいだろう。

女がなにかうめきながら寝返りをうつた。俺はあやうくつぶされそうになつたが、この脳の主はとつせによけるとかそういうことはまったく考えてない感じで、半分つぶされかけてから「ぎやつ」とか言つてようやく移動した。大丈夫なのか、この親？

ようやく女は目を覚ましたようで、もぞもぞと布団から這い出した。俺の宿主は、まだ布団の中にいる。そんな俺の頭を、女は軽く撫でてから、ベッドから降りていく。宿主はといふと、また寝返りをうつて一度寝を決め込んだようなのだ。

そのまま、どれぐらい時間が過ぎたのか。ほんの数分だったのか、何時間も過ぎたのか。この宿主の時間感覚がどうにもズれてるようでもなくわからないのだが。不意に目を覚まして、布団の端から顔を出した。

「はい、お待たせ。ごほんですよー」

なんだ、あれは！ 床に置いた皿に、茶褐色のスナック的な何かが山盛りになつてゐる。それを目にした瞬間、宿主はすとんとベッドから飛び降りて、まっしぐらに皿へ駆けていつた。

巨大な女が持つてゐるものを見て、ようやく俺は気づいた。女が持つ箱には、猫の顔が描かれていた。

宿主は、その茶褐色の物体にがついた。今まで味わつたこともないとてもなく生臭くて泥団子っぽいそれを、がつがつほおばることを、俺は阻止することができなかつた。食べ物を目の前にしたこいつの意思是、とつもなく強かつた。

俺は思い知つた。違法次元ドラッグは、危険な遊びだ。

ある日目が覚めると、そこは小高い丘の上だつた。

周りには少し背の低い木々がまばらに生えていて、私は少し遠くのほうを見下ろしてみた。赤い屋根の大きな屋敷が見える。そうだ、あれは、私の家だ。実験は、成功したのか。私は自分の姿を見るため、首を巡らせようとした。だが、それはできなかつた。私は、私の体を、自由にできなかつたのだ。首を巡らせるどころか、指一本動かすことはできない。

いや、それどころか。自分の家を見下ろしているのにも、自分の目で見て見えているという実感が得られない。不思議なものだ。周囲がどんな様子か、気配でわかるというか、今までに体感したことのないまったく別物の感覚器で感じ取つているようなのだ。

あの家で、私の体は死に瀕している。あるいは、もう命は尽きているかもしれない。遅かれ早かれ、それは明らかになるだろう。今日は良い天氣だつた。もう間もなく日が暮れる。ついさつき目を覚ましたばかりだといふのに。

そしてまた、やがて翌朝を迎える。あつさりと一日一日が過ぎていく。一応、夜になると眠るというのに近い状態になり、翌朝には目覚めているのだが、その状態さえそれまで知っている眠る起きるというのとは仕組みがまるで違うのがわかる。ある程度は覚悟を決めていたとはいえ、こうも違うものなのか。樹木の自我、というものは。

私は、死にたくはなかつた。死ぬのが怖かつた。だから、脳内次元を樹木と同調させ、そこに意識を移して生きながらえることにした。もともと脳内次元構造の分野では最先端技術にたずさわっていたので、法律や倫理の問題さえ無視できればいろいろできる。ターゲットにしたのは、我が家からいつも見ていた丘の上の一本の木だつた。なんの木だかは知らないが、強い高次元自我のあることがわかつていた。私は、その木になることに成功したのだ。おそらく。

私が何をやつたのかは、家に記録を残しておいた。そのせいだろうか、数日もすると知り合いが何人も私の前に姿を現した。なにか言つているようだつたが、早回しのような早口で聞き取れなかつた。泣き崩れる者もいた。家に人が集まり、葬式が行われ、靈柩車が走り去るのも、早回しで見送つた。体感の時間経過速度は、どんどん早まつていつた。

またたく間に数年が過ぎた。体感速度は、年々加速を続けていった。四季がめまぐるしく巡った。なんだ、これは。街が見る間に姿を変えていった。巨大なタワーが建造されたり、災害で街全体が半壊したり、また復興したりを繰り返した。こんなはずではなかつた。私は何百年という長い時間をゆっくり生き続けて、大地に溶けるようにその一生を終えるつもりだつた。だが、これでは、まるで大地に激突するような勢いで老化の一途をたどつてゐるではないか。知り合いもどんどん死んでいく。よりによつて、この木の近くに墓地を作つてそこに埋葬された奴もいる。この私に死を自覚しろというのか。なんて奴らだ。墓標にも似た不思議なモニュメントも作られた。

目の前の風景は、もう私の知る私の暮らした街のそれではない。山々さえも姿を変えた。感慨もなにもない。ここは、まったく未知の世界だ。

嫌だ。死にたくない。私は、まだ死にたくない！

数百年という時が恐ろしい勢いで過ぎていく。

私は、もうすぐ死ぬのだと、わかつた。

だが私は、もう涙を流すこともできない。

ある日目が覚めると、そこは宇宙の彼方だつた。

何万光年も彼方にある地球が見える。見えるのだ。タイムラグなしに見えている、という自覚がある。いや、何億光年か。距離感と時間感覚が喪失しているのだけど、地球が見える、という自覚だけがそこににある。

だから、ここはどこなんだ。宇宙のどこかだ、ということはわかる気がする。まわりじゅう、暗闇に浮かぶ星ばかりが無数に見えているからだ。だがそういう星々はすべて、すぐ手の届くところにあるようにも、宇宙の果てに張り付いているようにも思える。そもそも時間と空間の感覚が失われているのだから、どこ、とか、いつ、といった自問そのものが解を持つわけがないのだ。

そうだ。脳内空間は高次元の広がりを持つ。縦、横、奥行き。この三つの先にあるのは、たとえば時間であつたり、さらにそれ以上の重ね合わせであつたり。

時間や空間といった感覚がないというのは、紙に一本の線を引いてあつて、その紙を折り曲げて線上の一一点地点をくつづけているような感じ。その線上の、どこ、という制限が消滅しているということは、その線上のどこにでも同時に存在しているようなものなのである。

そうなのだ。この意識はいま、宇宙全体を己が内側に包み込んでい るのだ。

その時、初めて気がついた。

周囲には、様々に気配が充満している。隣どうしくついている、とい うレベルの話ではない。無数の透明なセロファンに描いた絵が、でたら めに重なり合い、ちりばめられているような、そんな状態だ。そのひとつ ひとつが、人の意識だということがわかつた。苦悩や混乱、開放感、快 感、悲しみ、憎しみ、放心、様々なイメージが渦巻いている。そんな中 の一つとして、いま混じり合おうとしている。すでに混じり合っているよ うな氣もする。これが、今まで人類が知り得なかつた、本当の世界の 姿なのか。

私とは何なのか。私はいま何者なのか。私は以前は何者だつたのか。 私は私なのか。私は私ではないのか。

私の中には私ではない私があるというのか。私こそが私でありそれまで私だと思っていた私は私ではないのか。今この瞬間の私は一瞬前の私と同一なのか。次の瞬間の私は、私であるのか。一瞬過去と一瞬未来が同一である今、無限に生成される私は今という瞬間に重なり合い、私が私であることを失っているのではないか。私の周囲にあるこの意識たちのいくつか、あるいはすべては、私自身なのではないのか。

たちまち、周囲の意識たちからも、同じ混乱や疑念が吹き出してくるのがわかつた。ここに集まつた高次元意識たちは、私が私であろうと努力し、必死に私自身を探し、私を見失うまいとしていた。混沌となつた。

しかし、混乱を起こさない意識たちもあつた。むしろ、そういう意識のほうがよほど多かつたのだ。あらゆる意識でぎゅうしり埋め尽くされたこの状態の、その隙間にはさまるように入間の意識がまぎれていて、押しつぶされまいと悲鳴を上げているのだ。

木々の意識は静かだった。虫や魚、草花、犬や猫、さらに原始的な生き物、生き物とは言いがたい物質など、様々な意識がそこには満ちあふれていた。

私は、気づいた。私が私であろうと苦しみ、もがき、しがみつこうとしているのは、あらゆる生き物の中で、人間の意識だけであることを。

おわり

コミュニティ紹介

Mixi コミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、いらっしゃいませ。

文芸文学、SF やファンタジー、詩や川柳。絵画やイラスト、立体作品、写真やインスタレーション。音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、なんでも歓迎。

とにかく「創る」人のためのコミュニケーションを支援し、その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)

開設日：2012年02月20日

管理人：しちみ黒猫

副管理人：かーる

カテゴリ：趣味

参加条件と公開：

レベルだれでも参加できる(公開)

トピックの作成権限：

参加者が作成できる

コミュニティurl：

http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574

Mixi コミュニティ『創作が好き!』編集
作品集
『ある日目が覚めると、そこは——』

編者 檜崎 六呂
2012年4月2日 第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、それぞれの著作者に著作権を有します。